「森はぼくらの教室」

～自然と共にあり、学ぶ学校のあり方をもとめて～

長野県伊那市立伊那西小学校

１，私たちの願うもの

⑴　学校林　林間

伊那西小学校は伊那市の西、中央アルプスの裾野に広がり伊那市街地を一望できる小高い丘陵地帯ますみヶ丘に位置する。「小沢小黒の水清く　瀬は鳴り響く北南」「四方の眺めうち開け」と歌われるように、豊かな自然に恵まれ、学校に隣接してこんもりと茂った「学校林」があり、その中には「森の教室」や「水車小屋」などが建てられている。

各学年単級の全校児童数 52 名。H30 年度より伊那市小規模特認校として認定され、区域外通学をしている児童も在籍する。学区は広く、徒歩通学で通う子どもたちの中には、標高差 100 メートル、距離にして 4 キロ近く離れた自宅から子どもたちは通学している。このように豊かな自然に囲まれた児童たちだが、休み時間になると校庭や学校林に出て遊ぶ子どもよりも、体育館のような屋内での遊びが多い。

学校林にある施設「森の教室」には、大きなテーブルと丸太のベンチ、黒板等が設置されていて授業も可能であるが、「校長講話」「全校音楽」等の集会や「林間マラソン」「林間に親しむ日」等の全校行事、林間に生える「タケノコ（１年）」「梅（２年）」「タラの芽（３年）」「しいたけ（４年）」といった学年ごとの収穫活動にその時期時期では活用されているものの、授業での学校林の利活用の見返しが求められている。

⑵学校林を学びの森に

このように広大な学校林を持つ恵まれた環境の中にあって、当たり前のようにある学校林。児童が、森の持つ価値に触れ、無尽蔵の宝庫である森に全身で浸っていって欲しいと願い、児童自身が「森は僕らの教室」だと感じられるような学校を創造していきたいと考え、「自然と共にあり、学ぶ学校のあり方」はどうあったらいいか研究と実践を重ねている。

２，本年度の実践と実践例

～「天気がいいから外で授業!」になるまで～

⑴環境の整備

①教師自身の研修と共通理解・・・県主催のスエーデンに学ぶ研修会や自然体験活動の研修への参加、地元の自然学習会、県内小規模校実践校に学ぶなどの報告等を特認校連絡会（週１回）や職員会議（月１回）で行い、職員全体で森に関わる活動や自然体験活動などの研修をし、職員間で自然観等を共有する時間を取っている。

②学校林の整備・・・学校林が学びの場にふさわしい場となるよう学校林の森林整備を進めている。本校は地域との関わりが深く、学校林も地域の方が様々な想いを持って関わっており、学校林の整備にあたっては、地域の方との懇談を重ね、学校林の共通ビジョンを創ってきている。

⑵子どもたちと森～授業と森との関わり

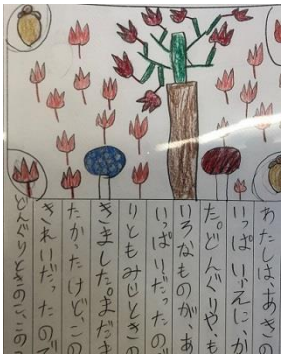
1 年生　**見立て遊びからセミの抜け殻集めへ**

森に一番近いところにあるのが１年生の教室なので、休み時間や、集団下校までの待ち時間などでどんどん外に出て見立て遊びをしていた１年生。８月、林間のセミの抜け殻を見つけては、拾ったり木の棒で落としたりして“森の教室”の机に並べるようになった。「似ている抜け殻はどれかな？」と似た大きさや色のものを仕分けすると、大きく三種類に分

類。ひとつ目は形の大きな色の濃いセミの抜け殻。ふたつ目は中くらいの大きさの茶色のセミの抜け殻。もうひとつは、小さな薄い茶色のセミの抜け殻。調べてみると、大「アブラゼミ」中は「エゾゼミ」小は「ヒグラシ」。「森の教室」の黒板には、「17，38，32」と、三種類のそれぞれの数を「１，２，３・・・」と声に出して数えたそれぞれの個数が書きこまれ、それが見やすい「表」にまとめられた。林間での活動が、知らず知らずのうちに算数の学習や抜け殻の共通点を見出す思考に広がっていった。

２年生　季節探し～秘密基地～森の捜し物名人

生活の学習で春さがし、夏さがし……と森での活動をしている２年生。国語学習の単元「きせつのことば秋がいっぱい」で、林間へ。「しいたけが出てる」「まつぼっくりだ」「モミジだ」と、思い思いの秋を見つけて、発見カードに記入。ドングリをむいてみた人、イチョウにみとれた人、たくさんの秋にびっくりした人、どろぼう草をじっとみた人……林間でたくさんの秋を感じた学習など繰り返しているうちに、朝の始業前や休み時間、集団下校まで待っている時間と外に出ることが大好きになり、森の中にそれぞれが「秘密基地」を作ったり、森の中を歩き回ったりして、たくさんのものを発見。マラソン後の自然のお話しで話題に出た木を、今年の樹木調査で出来た「木の地図」を見ながら、「28番あった！」といち早く見つけ出したり、トチの実を拾ってきて全校が遊べるお店を展開したりと、学校一の「森の捜し物名人」になってきた。



3年生　ミヤマシジミの来る森に～アスレチック

９月、ミヤマシジミ研究会の岡村先生と中村先生を講師に、絶滅危惧種の蝶であるミヤマシジミの観察を行なった３年生。好きな植物は「コマツナギ」という低木であること、オスとメスで羽の表の色が全く異なることなど学習。学校の林間そばに外用のゲージ、教室に飼育箱を設置しミヤマシジミの幼虫を放しました。理科の時間を中心に、観察を続け手、貴重なミヤマシジミの羽化を観察することが出来、2 学期終業式に全校の前で発表。また、算数の「天秤」の学習を森で行い、そこから安定した三角ブランコ、渡り綱などを創り、アスレチックづくりへと活動を拡げている。

（実践例は「資料」参照）

4年生　水鉄砲～生き物学習　林森の教室の理科学習

６月。理科「閉じこめた空気と水のせいしつ」という単元で“水鉄砲”を作る事に。「水鉄砲に使う材料の竹、どこかにあるかなあ。」の問いかけに、すかさず「林間にあるよ！」と４年生。理科室を出て、林間にある“森の教室”で授業。水鉄砲の筒用に林間の竹を切らせてもらい、筒の中の押し棒は、木槍など竹筒に合わせた太さの木を林間から分けてもらい、「押し棒はもっと太い方がいいんじゃない？」「中の布をしっかり巻かないと、筒の後ろから水が飛び出るよ」。相談しながら水鉄砲を制作。また 11 月には春にもクマバチの学習でお世話になった元信州大学農学部教授の建石先生から、冬の昆虫について学習。お話をお聞きしたあと林間に出て行き、昆虫探し。腐った木の裏を見て、蜂を見つけたり、たまごをつけたり、地蜘蛛をみつけたり、冬の昆虫についての知識を実際に確かめた。

5年生　５年発・外で遊ぶ学校に！～どんど焼き～

11 月、国語「明日を作る私たち」で「学校生活の問題」を検討した５年生。「外に出て遊ぶ子が少ない」という観点について検討を進め、アスレチックを創ったら？外に出る時間を作ろう、など様々な手立てを考えて、2 学期の終業式に全校に提案。来年はクラス５人で児童会を引っ張っていく立場になる５年生は、今からその実現に向けて活動をスタートさせた。また、総合や家庭科の時間でお正月の季節行事について学習し、自分たちが田んぼで育て、収穫した餅米で作ったお供え餅を 1 月 11 日に「鏡開き」で割ると、学校の児童玄関前の

正月飾りを外して「ミニどんど焼き」を実施。森に出て長い枝を探すと、森で学習していた３年生と協力してやぐらを組み、どんど焼きを実施。自分たちのお正月行事を楽しんだ。

6年生　水車小屋～音楽のひびき

林間には、かつて実際に米の粉をひいていた“水車小屋”があり、本年度、地域の方の修繕で再び動くようになった。この水車のスケッチを図工の時間おこなった６年生。描いている最中、耳に聞こえて来る林間を吹き抜ける風の音や、木々の葉の色づきに感じる秋に包まれて、水車の構造を確かめながらしっかり観察。大きさや複雑な構造を見取ってエンピツでの迫力のある作品が完成した。また音楽の時間、林間「森の教室」で中部連合音楽会発表曲「We are the world」のハーモニー作り。音楽室の壁に囲まれた空間ではなく、まわりを木で囲まれた空間のハーモニーに「森で歌うと、響きが違うよね」。「文化会館のホールもこのくらい広いから、教室の他の学年にも聞いてもらうつもりで練習しよう。」教室の広さ、体育館の広さ、そして、森のどこまでも広がる空間。そこで、校舎内の他の学年に向けて歌うこと。森でも通る声だったら、大きな文化会館でもみんなに届く声になる。その意識が、子どもたちののびのびとした歌声に。連合音楽会当日、代表の子が「私たちの学校には林間があって、歌の練習もそこでしてきました。」と学校紹介したように、森が育ててくれた、12名の合唱が、伊那文化会館ホールに響きわたった。

音楽　森に響く歌声～ビューティフルネーム

２学期に入ると、「天気がいい日は、外で音楽」を合言葉に、リコーダー・鍵盤ハーモニカの練習や、歌、鑑賞などを森の教室で行った。

５年生のリズムづくりでは、既製の楽器ではなく、森の素材を使って音を出したり、１年・２年の鑑賞では、２拍子・３拍子という拍子にあわせて森の中を歩いたり踊ったりと、様々な「感受」と「表現」が見られるようになった。11 月、「仲良し月間」にちなみ、月の歌に「ビューティフルネーム」を設定すると、２年生は曲に合わせて自由に身体を動かし始めた。森の中で曲に合わせて行進する子、木の橋の上で弾みをつけて音楽に乗る子、さらには、森に落ちていたひもをパートナーに見立ててダンスを踊る子。そこから外で曲に合わせて自由に身体表現をする全校音楽を組んだ。「森とも仲良くなろう」と、投げかけたところ、全校音楽後に保健室の壁の「仲良しの木」には森のキラキラがたくさん掲示された。

３，本年度の成果と課題

⑴　成果

４月からこれまで、学校林での学習の可能性を探りながら、学校林を中核とした自然に学ぶ学校づくりを行ってきたが、季節は移り、学校林は冬を迎えている。寒さ厳しい時期ではあるが、休み時間や放課後に、学校林を飛び回ったり、木々や葉っぱにまみれるようにして遊ぶ児童が増えてきていることを職員一同実感している。

３年生の R さんは学校林で学んだこのごろ感想に以下のように記している。「私は森であることに気がつきました。私は自然に関わるものを作って、自然といっしょに学べるといいなあと思ったし、森にいれば何でもできることに気がつきました。小さい頃は森って寒いなあと思ってたけど、森で人生が作られていると気づいたら、自然が楽しくなって、寒かった林間が、温かな林間に変わったなあと思いました。」

このように、児童が学校林に触れ、親しむことを通して、学校林に対する感じ方を変容させ、学校林と自

分を重ねて見るという見方を育てるというような、良き学びの場となってきていることを感じている。

(2)課題

(1)成果のような姿に導いた背景の一つに、児童の学校林へ向かう関心を後押しした一つの実践がある。それは、毎週木曜日の朝の全校活動では「林間マラソン」が行われ、子ども達は、学校林の中にあるマラソンコースを走って体力作りをしているが、本年度、その林間を走った後の体を休める時間に、理科専科教員から全校に向けて、「伊那西小に来る蝶の話」「なぜ木の葉っぱは紅葉するの？」など、森の四季折々に展開する様々な生き物や植物の話をし、何気なく見ている自然へ、興味関心や視点を向けようとしてきたことである。このような、自然への関心を広げる活動を位置づけたりした適切な教育課程を構築することが、私たちがめざす学校に向かうということが示唆された。そこで今、自然に恵まれた伊那西小学校という地域を生かした特色あるカリキュラムを据えることを検討している。

案としては、「①森林・自然との関わりを深くしていく。それを子どもの学びにしていく『自然観察プログラム』」「②宮沢賢治の世界のような森が絵になり、音楽になりと理科に限らず学習が広がっていく『自然やふるさとに学ぶ学習』」「③身近にいる人や近くにいる講師を学校に招いて学ぶ『地域プロや、専門家による授業』」の３本の柱を据えようと考えて、その具体的な教育活動を検討している。

児童が自然に親しみ、主体的・探究的に学ぶことができる学校を求めて、児童とともに、本校に集う職員が一丸となって、日々の教育活動の実践を重ねていきたいと考えている。

＜平成 31 年 1 月作成＞